

国語と論理

(1) 「論理的な文章」って、そんなにすばらしい？

「論理」という言葉は通常、良い意味で使われます。私も「論理的にしゃべる練習の必要がある」とツイッターで書いたばかりです。教科書が読めない、という子供を前にして、「たいへんだ。言葉の意味をきちんと取れるよう訓練しなきゃ」と危機感を持つのは当然です。

たしかに国語の時間では「論理」のトレーニングはあまりされず、「作者の心情を読み取れ」とか「深さを味わえ」といった情緒的な指導が多いという意見はある。ならば、元凶である「情緒過多」を切り離し、論理そのものをドライにやろう、となったのでしょうか。ここまではわかる。

しかし、論理をやるなら「論理的な文章」で、というところから、間違いがはじまります。論理的な文章って何でしょう？ それを読むと論理のトレーニングになる？ そもそも文章と論理の関係は？

日常的には「論理的」が「わかりやすい」と混同されることもあります。しかし、両者ははずれることもある。典型が法や行政の文言です。なるべく「漏れ」をなくし言葉で壁を作ろうとするので、一種の「つじつま合わせ」になる。また権威を盾に批判を封じようとする。だから文章としてはわかりにくくなりがち。

しかも困ったことに、言葉は「論理的でない」方がわかりやすいことさえある。その方が人に訴えたりする。言葉の不思議です。いつかの「日本死ね！」を思い出してください。論理は破綻しているのに、かえってインパクトを生み、「意味」を持ってしまった。

(2) 実は私たちは「論理」がそんなに好きではない？

こうしたことが起きるのは、人間が微妙な「飛躍」や「わからなさ」にかえって反応するためです。人間は「正しいこと」をしたいと思っても、「刺激的なもの」にも惹かれてしまう。言葉は人間にとって「好き/嫌い」の対象（消費財）でもある。ときには正しく読むより「おいしく」読みたくなる。

論理が破綻し、意味など生まれえないはずのところに、人が意味を読んでしまうのもそのためです。私たちが日常行うやり取りの多くは、中途半端だったり、意味不明だったり、論理的に破綻していたりする。でも意味を持ち、さまざまな「現実」を生み出す。いちいち「意味の不完全燃焼」にこだわるよりは、とりあえず意味を読んでしまった方が私たちには気持ちよく感じられるからです。（意味の未完成にこだわる人たちは、ときに「こだわりが強い」とか「空気が読めない」などと疎んじられもし

ます)

(3)「論理」は言葉には存在しない？

さて。では、いかがわしい意味のやり取りから切り離されるのが「論理的な文章」なのでしょうか？ 純粋な論理的思考を追及すれば最終的には数字の世界にたどり着きます。雑音のない論理。1+1=2という計算は、どこで誰がやっても同じ結果のはず。普遍的です。

ところが面倒くさいのは、算術でさえ「言葉」と「人間」の中におりてきた途端に、雑音だらけになることです。1+1=2も「どこで」「誰が」「何のために」によっていろんな意味を持ちうるのです。

たとえば、です。恋人同士がキスをしているときに「1+1=2だね」との発言があったら、それは「結婚しよう」という意味になるかもしれません。会社の決算報告で「1+1=2だぞ！」といったら、「ルーティンでやっていたら、会社に成長などない！」という意味になるかもしれません。

これは何を意味するのか。

言葉の「論理」は食べ物の栄養素と同じなのです。裸では存在しない。タンパク質そのものは食べません。必ず料理とともに取る。論理も言葉の中にあります。それを見つけ、時には疑いつつ、その作用を受け取るのが言葉の「論理を読む」ことでしょう。

つまり、言葉を扱う教科では、論理は言葉の中から取り出され、かつそのプロセスを読まなければ意味がないのです。過去のモデル問題(のどくに記述式)が失敗したのも、匂いや雑音にまみれるはずの言葉というものに、無理に論理を演出しようとしたため。それで不自然で気持ち悪い問題になった。

(4)じゃあ、どうしたらいい？

では、どうすればいいのか。「ありがたい文学作品」を使えばいいのか？ 違います。そんなにいらぬなら、文学など捨ててもいい。そのかわり、すべての文章を「まるで文学のように」読む。紅野さんがあの著書で実践された「テキスト分析」がまさにその一つの例です。ここは、もう少し説明します。

文章では論理や意味の整合性はとても大事です。でも、どんなに論理的で自己完結的な装いをまとった文章でも、「文脈」や「効果」から自由にはなれません。だから「1+1=2」の部分が発掘するなら、それが文脈の中でどんな効果を持つかを見極めねば意味がないのです。

「言葉」と「社会」におりてきた「論理」はほんとうに厄介です。表向き立派な発言でも、裏にとんでもない意図を隠し持つことができる。人は往々にして都合の悪い部分はごまかすもの。そうした部分をも含めて「読む」能力を養うのが国語の役割

でしょう。

言葉の複雑さをよく示す例の一つはアイロニーです。「Aだ」と言いながら、同時に「Aじゃない」と言える機能です。「おいしいね」と言いながら、その文脈や言い次第で「まずいね」を示してしまう。小学生でも操れる「ウソの力」です。

(5) 言葉とモノは、ずれる

18世紀の英国は科学への期待が高まった時代でした。そのために、言葉とモノを1体1で対応させようとする人も出て来た。でも、そう簡単にはいかない。いろんな人がこの考えを批判し、なぜだめなのかを説明した。

言葉とモノはずれる。でもおかげで言葉は、モノ的思考ではカバーできない想像や仮想、現状批判などに威力を持ちます。ところが「現代の国語」(一年生用)や「論理国語」(2年生以上)で文科省が推奨するのは、がちがちに言葉をかためてモノに似せようとした「実用的な文章」なのだそうです。そこには、瘦せて貧しい、ひどく現実味のない言葉しか残らない。

(6) 「実用的な文章」のウソ

こう考えてくると、実用風の文章や資料を扱えば、論理の訓練になり、ひいては実社会でも役立つという「論理国語」の理念がかなり近視眼的で浅薄だとわかります。はっきり言ってとんちんかん。

たしかに契約書や行政文書には、野球のスコアブックやケーキのレシピと同じような合理性があるかもしれませんが、でも、こうした合理性は用途によってさまざまなのです。どの「合理性」も、きわめて限定的な状況に向けて作られている。そういう特殊な用途のための文章を習得させるのが国語の役割なのでしょうか。それにテスト主導でそれをやっても、結局は「試験に出る実用風文書の定番」が幅を利かせるだけでしょう。

純粋な論理トレーニングを！という気持ちはわかる。でも、雑音性を排除した文章には「読まれることで意味を生み出す」という要素が貧弱なのです。読むプロセスがなければ、「読解を試す問い」は作れない。だから、そういうテストは、紅野謙一さんも指摘されたように、情報の「量」に依存したものになる。

「実用的な文章」では適切な設問が作れないということです。だからこそ、文章を複数にせざるをえない。これは複雑さを装った単純作業にすぎません。そういう単純作業の能力が社会に出たら必要だ！という見方もあるでしょうが、もっと比重は小さくて十分でしょう。それに他の科目ですでにやっています。

最近の諸事件でも明るみになったように、合理的に作られたように見える行政

文書や契約書も、人間の思惑の中では簡単に役割を変えます。また、法といえども策定や運用の背後に意図や政治性が隠れている。読解力が重要なのは、そうした意図を読むときです。

「実用文書を読む訓練」と称して、実際には「既成の規範への盲従」を強いている、という批判が出るのももっともです。もし国語のテストに出すなら、規範が人間と言葉の中で汚れたものになっていく、そのプロセスを上手に問うてほしいです。